

久高島の収穫祭と穀物起源伝承

— 島と王府の祭祀 —

畠 山 篤

一 はじめに

島と王府の穀物儀礼 沖縄県久高島の穀物儀礼は、麦と粟の初穂祭と収穫祭の4つの穀物儀礼から成っている。そして、その儀礼が基本的に朝拝^{アサガキ}みと夕拝^{ユソガキ}みから構成され、それらに関連した儀礼が付随している。畠山篤「二〇〇七a」・「二〇〇七b」は、このうち、麦と粟の初穂祭の朝拝みとそれに関連する儀礼が久高島の穀物儀礼、夕拝みが首里王府の穀物儀礼であり、それらが島と王府の穀物起源伝承と対応している、と論じた。

本論のねらい これに次いで本論は、麦と粟の収穫祭の次第を可能なかぎり復原して記述する。そして、それらの儀礼が島ならびに王府の穀物起源伝承と対応関係にあることを指摘し、またそれらの儀礼が初穂祭の儀礼と照応関係にあることを指摘する。初穂祭と収穫祭は表裏の関係・因果の関係にあるので、この2つの祭りが照応関係にあるのは、当然予想されることである。

本論は畠山篤「二〇〇七a」・「二〇〇七b」を承けているので、表と図の番号も前論を承けることにする。

二 収穫祭の次第と

穀物起源伝承の対応一覧

収穫祭の次第と穀物起源伝承の対応一覧 比嘉「一九九三b」・三五「五三頁」と筆者の調査を基にして、現行の収穫祭の次第(儀礼)を復原してまとめると、表9のようになる。また、これらの次第が久高島の穀物起源伝承ならびに王府の穀物起源伝承と対応している場合は、その対応する条を最下段に示す。

以下、この一覧表の順に見ていく。

| 3 H II | | 2 日 日 | |
|--------|---------|--------------------------------|---|
| 午前 | | 夕 | |
| 神饌の共食 | 外間殿での拌み | 祭場の後片付け | 夕拌み (夕祭りとも) |
| | 神饌の準備 | vi ウンサクの神酒上げ (●王府関係者への神酒上げ) | vi ウンサクの神酒上げ (●王府関係者への神酒上げ) |
| | 村の初拌み | vii 祭場の移動 | 外間殿 |
| | 外間殿 | 御殿庭 | 道中 |
| | | 赤綾屏風と白い屏風を外すのは外間殿のみ | 表5 ウンサクの神上げの次第参照 |
| | | 表5 ウンサクの神上げの次第参照 | 表5 ウンサクの神上げの次第参照 |
| | | | 《A 種物を得た者》・《E 得た穀物の種物の種類》・《F 穀物の種物を蒔いた場所》・《I 琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》・《I 二月の久高島行幸のはじまり》 |
| | | | 《A 種物を得た者》・《E 得た穀物の種物の種類》・《F 穀物の種物を蒔いた場所》・《I 琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》・《I 二月の久高島行幸のはじまり》 |
| | | | 《A a 食物豊饒と子孫繁衍》 |
| | | | 《A a 食物豊饒と子孫繁衍》 |
| | | | 《A a 食物豊饒と子孫繁衍》 |

- ① わかる範囲でかつての次第を復原して記した。
 ② ●は筆者の想定である。
 ③ 朝拌みと夕拌みに付した i・ii などの記号は対応しており、「島と王府の穀物起源伝承」に付した A・J などの記号も、「表3 久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧表」の記号と対応している。
 ④ 島と王府の穀物起源伝承のモチーフを区別するために、島の伝承のモチーフに《》を付した。

三 前々日

量り前 前々日の午前中に、1地当たりいくらと定めて、各地主が祭料の穀物(かつては麦の穀物儀礼では麦、粟の穀物儀礼では粟。現行では米に統一されている)と少々のお金を年上の村頭の家に持参する。

これを外間ノ口の掟神の指すのもとに、まず村頭の妻たちが「元

初拌み」をする各元家に分配する。穀物の分配は、外間ノ口家に3升5合、久高ノ口家に3升、外間根屋に3升、大里家、大西鎔家、イチヤリ小家に各1升、白太郎家に5合である。

次に、1日目の嶽廻りのンバイの料として外間根神に1升5合、3日目の村の初拌みの祭料として外間根神に残りを配る。

以上を「量り前」という。

「持ち前」(唱え言、祝詞)は、この量り前のことを村頭が祭料を集めている、と述べている。

四 前日

1 元の初拝み

元の初拝み 前日の午前、各元家で「元の初拝み」（元の御初上げとも）をする。この儀礼は各元家レベルで収穫物のお初を神饌として供える収穫祭である。その元家と司祭者は、表10のとおりである。神饌は、①昨日（前々日）、徴集した穀物で作ったンバイ（餅・お握り）、②ンギヤナスネー（苦菜の和え物）、③酒（泡盛）である。②③の費用は元家が出す。

表10 元の初拝みをする元家と司祭者

（比嘉康雄、1993b、37頁を基に作成）

| 元家 | 司祭者 |
|------------|-----------|
| (1) 外間ノロ家 | 外間ノロ |
| (2) 久高ノロ家 | 久高ノロ |
| (3) 外間根屋 | 外間根神 |
| (4) 大里家 | シマリ妣・赤人ミー |
| (5) 大西銘家 | 久高根人 |
| (6) イチャリ小家 | アマミヤー |
| (7) 白太郎家 | 久高ノロ |

外間根屋（外間殿）での次第は、次のとおりである。ミー大庫裡ミンナカの香炉の横に9個のお飾り（ンバイ）、ンギヤナスネー、酒が供えられる。これは、天道加那志（日神）、マチ（テイ）ヌシユラ親主前（月神）、王時代の神加那志の3大神に対する神饌である。次いで、司祭者の外間根神が大きなンバイ、ンギヤナスネー、酒を膳に供えて、火の神、ミー大庫裡ミンナカ、床の神を拝む。次いで、外間根神が同

じ神饌を別の膳に供えて、ムンブジー・ムン妣（外間根屋の始祖）を拝む。

それから、参列した神人が3大神に供えた神饌を共食する。この時、刺し身も添えられる。参列する神人は、外間根神、外間根神の掟神、外間ノロ、外間ノロの掟神、ムンブジー、ムン妣、外間根人、妣加那志、ハニマンの9人である。これを御盆食ミーン（御馳走を食べるの義）という。

最後に、残りの神饌が高膳に分けられて参列者の家に届けられる。その他の各元家でも、同じ要領で元の初拝みをしている。

「持ち前」（祝詞）は、この元の初拝みのことを、村頭が祭料を集めて各元家に供える、と述べている。

種下ろしと元の初拝みの照応 畠山「二〇〇七a、一一六・一一七頁」

述べてのように、九月にシマの主だった元家がまず最初に麦の初種を下ろしてから一般家庭の地主が種下ろしをしている。この点、一月に行われたらしい粟の種下ろしも同様だ、と推測できる。

そして、この麦の種下ろしをした元家が、収穫祭の最初に元の初拝みをしている。調査時には元の初拝みをする7軒の元家のうち、(1)の元家が麦の種下ろしをしている。この元家の軒数の若干の不一致は、なんらかの事情によって元家の祭祀儀礼が時に執行したりしなかったりすることによる。種下ろしにしろ、元の初拝みにしろ、これを執行する元家の数は年によって増減がある、と考えられる。

こうしてみると、種下ろしと元の初拝みが照応している、と考えられよう。現に、種下ろし（種取り祭）と収穫（豊年祭）は、はじまり（原因）と終わり（結果）の関係にあり、八重山諸島でも穀物儀礼の大きな折目になっている。そして久高島では、この穀物儀礼に元家が優先的にかかわっている。前々日の午前中に各地主が元の初拝みの祭料として穀物を供出したのも、元家による穀物儀礼の重要性を示している。

2 量り前

量り前 初穂祭と同じく、前日の午後、1地あたりいくらと定めて、各地主がンバイ(収穫祭の神饌)と樽真神酒の料とする穀物(かつては麦の穀物儀礼では麦、粟の穀物儀礼では粟。現行では米に統一されている)と芋を組の親の家に持参し、組の親がこれを榊で量って受取る。これを量り前という。

「持ち前」(祝詞)は、この量り前のことをお父さん・お母さんが手・榊で量って祭料を集める、と述べている。

ンバイ作り 組の親はンバイを作る。ンバイには、ンバイと地頭ンバイの2種類がある。地頭は村頭のことである。今日、この祭りでも村頭が地頭を称するのは、王府時代の行政の末端に位置する村役人の地頭の代理だろう。

麦ンバイはターチメともいう。その古態は、新麦を炒って粉にして湯冷ましを入れて木臼で搗き固めたもの(餅)である。粟ンバイの古態は、新穀の糯粟5、黍5の比率で木臼で搗き固めたもの(餅)である。現行では、いずれも米のお握りになっている。

このンバイに奇数枚のユーナの葉を被せ、これらを奇数本の薄の茎で刺す。そして、これらの上にマース(真塩)を入れた小皿を載せる。いずれのンバイも、策に入れて供えるので策ンバイともいい、また地から供出して作るので地ンバイともいう。

樽真神酒作り 初穂祭と同じく、組の親は神酒当なりに樽真神酒の料を渡し、神酒当たりはこれを受け取って樽真神酒を作る。

3 クカウーの魚

クカウーの魚 漁の男神人・ソールイガナシー2人が、各戸からお金を徴集して塩鯖を買い、束ねておく。かつてはカーカサ魚だったという。現行では1日目と2日目の夕拝みの後(本来は朝拝みの後だろう)に執り行われるクカウーとクカウーの御盆にこの魚を提供する。クカウーの語義は不詳である。

大漁の祈願(感謝) このクカウーの魚は、初穂祭でのフカラク魚に照応するもので、大漁を祈願(感謝)する料である。

この男たちの祈願に込めて、司祭者のノロは「持ち前」(祝詞)で大漁祈願(感謝)をし、さらにクカウーとクカウーの御盆として儀礼化している。

五 準 備

1 ダビルンバイの準備

ダビルンバイの準備 1日目の早朝に、神饌のダビルンバイの準備を掃除役の最年長の家でする。ダビルの語義は不詳である。この神饌はこの日の嶽廻りに用いる。

ダビルンバイの料は前々日に徴集して外間根神に配った1升5合で、外間根神の掟神、掃除役5名、神酒ハミヤー(神酒を運ぶ役で、ナンチュの年長者が務める)によって作られる。4個の大きなダビルンバイは、必ず外間根神の責任のもとでその掟神が作る。普通の大きさのダビルンバイ18個は、掃除役と神酒ハミヤーが作る。

2 祭場の準備

祭場の準備 1日目の早朝に両祭場の準備をする。

屏風を張る 初穂祭と同じく、外間殿の天井に赤綾屏風(布)を張る。また、外間殿のタムトウ座に白い屏風(布)も張る。

タムトウ(神座)と冠の準備 初穂祭と同じく、タムトウ(神座)と冠が準備される。

儀礼と穀物起源伝承の対応 このタムトウ(神座)の料になる薄は、伊敷浜に漂着した瓢箪(白壺とも)に入っていた聖なるシキヨで、植物による久高島の御嶽のはじまりになったという由来とかかわっている。すなわち、儀礼と久高島の穀物起源伝承の(E得た植物の種類の種類)・(H植物による久高島の御嶽のはじまり)が対応している。

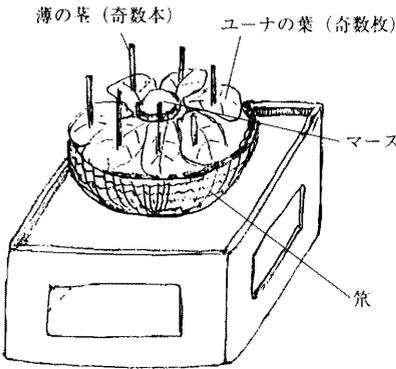
この点、初穂祭と照応している。

神饌の準備 初穂祭と同じく、村頭が村を左廻り(時計廻り)して辻々でウタイ(辻触れ・お知らせ)をし、これが合図になってンバイと樽真神酒が両祭場に運ばれる。

ンバイは各組の親によって2つの高膳に載せられ、外間殿には7組、御殿庭には5組用意される。この他、地頭ンバイが村頭から出される。さらに、外間殿では外間ノロのンバイ、御殿庭では久高ノロのンバイが出される。

図6 ンバイの高膳

(比嘉康雄、1993b、40頁を基に作成。ただし一部変更)



初穂祭と同じく、各組の神酒当りによって作られた樽真神酒は、各組の親によって両祭場に運ばれる。それから、樽真神酒の配膳の準備がなされる。

六 朝拝み

1 外間殿での朝拝み

外間殿での朝拝み 朝拝み(朝祭りとも)は外間殿から始まる。

2 準備

外間殿の配置 祭場の準備が整うと、初穂祭と同じく村頭がウタイ(お知らせ)をする。

すると、両ノロとその掟神を先頭にして根神、根神の掟神、タムトウたちが外間殿に登場する。男神人、居神・村頭、大主は既に外間殿に参集し、所定の座に着いている。

参列者・祭場の配置は、初穂祭と同じである。すなわち、赤人ミーの場合には神酒桶の傍らにいる(図2参照)。

また、神女たちの服装は初穂祭の夕拝みと同じである。すなわち、両ノロは白いウチギに綾物をつけ、その上に大衣を羽織って大衣の合わせ目を紐で結び、頭には白鉢巻き、冠(トールズルモドキの冠)をつけ、手には王府から賜った神扇・絵描き扇を持っている。この両ノロの服装は、王府の神女としての立場を示している。その掟神とお供の神女たちは、他の神女と同じく白い大衣、白鉢巻き、冠を着用して蒲葵扇を手している。

儀礼と穀物起源伝承の対応 以上、初穂祭とおなじく、この儀礼に

おける赤人ミの座は、赤人ミが穀物の種物の入っている瓢箪(白壺とも)を手にしてハタスに蒔き、島人に分け与えたという島の穀物起源伝承(A種物を得た者) (F穀物の種物を蒔いた場所) に対応している。

この点、初穂祭と照応している。

3 持ち前

i 持ち前 次いで、両ノロとその掟神はンバイの前に立ち、ニライカナイのある東方を拝む。

次いで、両ノロが「持ち前」(唱え言、祝詞)を唱える。

比嘉康雄の採録 次における「持ち前」は、比嘉康雄の採録「一九九三b、四一(四四頁)による。この持ち前の伝承者は、外間ノロの掟神・西銘シズ刀自である。なお、小見出し、A、Bなどの段落区分、節を示す数字、()の共通語訳は筆者が付した。

祭日の祝福

- A一 三月又 三月の
 二 アラマツテイ 新マツテイ(新祭り)
 三 ギンシブン 御儀式(立派な手本を)
 四 ミンニビユイ ミンニ(壬に)
 五 グウテイリイテイ いっしょに
- 一の三月又は粟の収穫祭では六月又になる。Aは、三月(六月)の立派な収穫祭が壬の日にみんな一緒になって執り行う、と述べている。Aは祭日を祝福している。
- 元の初拝みの神饌の準備**
- B六 ムラガシラ チュウガシラ 村頭は(村頭が 中頭が)
 七 ウブグウロウタア お父さんたち(大五郎たちが)

- 八 ウブクウバラタア お母さんたち(大腹たちが)
 九 テイガバカイ 手で計り
 一〇 マシバカイ 榊で計り
 一一 イティンムトウ 五つのムトウ(五つの元家は)
 一二 ナナンムトウ 七つのムトウ(七つの元家は)
 一三 ウサギノチ お供えして(押し上げて)
- 五・七は実数でなく、聖数である。村頭たちが量り前をして徴集した祭料を各元家に届け、それらを神饌にして元の初拝みに供えた、と述べている。

朝拝みの神饌の準備

- C一四 サシプタアヤ ノロたちは(高級神女たちは)
 一五 ミンニビユイ ミンニ(壬に)
 一六 グウテイリイテイ いっしょになって
 一七 フカマシイガ 外間根人が(外間子が)
 一八 マイルマミヤ 管掌している御庭(守る真庭に)
 一九 イテンソーキ ナナンソーキ 五つの筥 七つの筥
 二〇 グウクウクウグウンテイ 五穀の幸
 二一 ウサギノチ お供えして(押し上げ直し)
 二二 サシプタアヤ ノロたちは(高級神女たちは)
 二三 ムカシシブン ギンシブン 昔からの御儀式 御儀式
 二四 ウサギイテイ アイビイラバ 供えましたから
 (押し上げて ありますから)
- 御殿庭では一七のフカマシイがクダカシ(久高子、久高根人)になる。ノロたちが外間殿・御殿庭での朝拝みに神饌を供えた、と述べている。
- 1段** 以上、祭日の祝福(A)、元の初拝みの神饌の準備(B)、朝拝みの神饌の準備(C)は、祭りの準備が整った、と述べている。これら

を1段とする。

全体的な繁栄祈願

- D二五 チジチジ ハナバナ 辻々 先々
- 二六 ウガミヤビイラバ 拝みますから
- 二七 シマユガフー クニユガフー 鳥栄え 国栄え

〈島世界報 国世界報〉

Dは、シマの全体的な繁栄祈願を述べている。

豊作祈願

- E二八 トウクウルムジクウウイン 農作物も〈作る物作りも〉
- 二九 デイキガフー 豊作〈出来果報〉
- 三〇 ウタビイミソーチョーテイ させて下さい
- 三一 シナムジャ ティリムジャ 麦〈シナ麦 照り麦〉
- 三二 サカラチャーユラントーラ 甘藷〈粟・芋〉
- 三三 デイキガフー 豊作〈出来果報〉
- 三四 ウタビイミソーリ させて下さい

Eは豊作祈願である。当然、麦と粟の豊作が述べられている。収穫祭なので感謝のことばがある筈ながら、祈願のことばで終始している。これは以後も同じである。このEは、収穫祭の主題を最もよく示している。

大漁祈願

- F三五 タティマンヌワカグウラーヤ ソールイガナシーは
- 三六 リユグウグウンテイ 〈二頭の馬の立派な若五郎(漁の神)は〉 竜宮の幸
- 三七 ウサギノーチ お供えして〈押し上げ直し〉
- 三八 ジユグウエーレエ 十五歳の少年
- 三九 サギンサムチ 竿魚を持ち
- 四〇 ウサギノーチ お供えして〈押し上げ直し〉

- 四一 タティマンヌワカグウラーヤ ソールイガナシーは

〈二頭の馬の立派な若五郎(漁の神)は〉

- 四二 ターキビシ ユアラビシ ターキ干瀬 ユアラ干瀬
- 四三 ピシアラカイ 干瀬の管掌者
- 四四 シユトウガイユ シウトウの魚
- 四五 マルガイユラ 大きい魚から
- 四六 ムーシクウワテイリンクワ スクガラス魚

〈藻の子躰で子(スク魚)〉

- 四七 アシマキテイマキ 大漁〈足に巻き手に巻き〉
- 四八 ウタピンソーチョーテ させて下さい
- 四九 タテマンヌワカグウラーヤ ソールイガナシーは
- 五〇 アサンバアスン 朝晩
- 五一 タイリヨウヌ ウヌゲー 大漁の お願い
- 五二 トウテイアイビトラバ しておりますれば

三八に15歳の少年とあるのは満の数え方による。竿魚を持つのは数え年14歳のシナムジャの最年長が務める。Fは、漁の神人・ソールイガナシーがシナムジャに持たせたクカウーの魚(竿魚)を神饌として大漁を祈願する、と述べている。すなわち、ニライカナイから穀物と植物の種物が漂着した島の穀物起源伝承に基づく穀物儀礼にちなみ、ニライカナイから魚もたくさん寄ることを祈願している。

2段 以上、全体的な繁栄祈願(D)、豊作祈願(E)、大漁祈願(F)は、諸々の祈願を述べている。これらを2段とする。

奉仕の誓い

- G五三 ウガムトウチャー 拝むときは
- 五四 サシブジユキ 神職がスムーズに務まるように
- 五五 ヌイマジユサ 神が愚くのもスムーズにいくように

五六 ギイテイキジュラサ 神様は静かに(美しく)
 五七 ウガマンセービリ して下さい
 五八 トウトウガナシ トウトウガナシ(尊加那志)
 神事がうまくいくように拜むので神々は静かに拜まれよ、と奉仕を誓っている。

3段 以上、奉仕の誓いを述べる段を3段とする。

3段構成 以上、1段は祭日を祝福し、祭りの準備が整ったことを述べ、2段は諸々の祈願を述べ、3段は奉仕の誓いを述べている。

持ち前の構造 以上、持ち前の構造を一覧にすると、表11になる。

表11 持ち前の構造の一覧表

| 段落区分 | | 主 題 |
|------|----|-------------|
| 1段 | 2段 | |
| A | D | 祭日の祝福 |
| B | E | 元の初拝みの神饌の準備 |
| C | F | 朝拝みの神饌の準備 |
| 2段 | | 全体的な繁栄祈願 |
| 2段 | | 豊作祈願 |
| 2段 | | 大漁祈願 |
| 3段 | | 奉仕の誓い |
| 3段 | | G |

儀礼と穀物起源伝承の対応 以上、持ち前は祭りの次第を辿り、祈願(感謝)を述べている。そして、持ち前のモチーフのうちの「豊作祈願」が、島の穀物起源伝承の「E得た穀物の種類の種類」・「I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」に対応している。

4 絵描き扇でンバイを扇ぐ

ii 絵描き扇でンバイを扇ぐ 持ち前が終わると、両ノ口は絵描き扇でンバイを3回扇ぐ。この所作の意味は確かでないものの、神饌のンバイを神扇で祓い清めているだろう。

5 ンバイの共食・分配

iii ンバイの共食・分配 次いで、ンバイの共食・分配が行われる。神饌のンバイのうち、外間ノ口・地頭ンバイの3膳が、外間ノ口家に届けられる。これと別のンバイを親ウンサクが外間ノ口、久高ノ口、根神の前に運び、ユーナの葉でンバイを包んで3つ差し出す。3人の神女は、それをそれぞれの掟神、親ウンサクにも分配する。また、2膳を弟ウンサクがタムトウ座のタムトウたちの前に運び、ユーナの葉でンバイを包んで1つずつ差し出す。

次いで、残りのンバイを弟ウンサクが盟に移し入れ、次のように分配する。まず、ンナグナー(14歳の男子)の母親たちにンバイが配られる。これは、この後のクカウでンナグナーが働くからである。この分配されたンバイをンナグナータマシ(割り当て)という。ンナグナー家ではこれを分けて親戚に配る。この分けられたンバイをアイカイイという。次に、両ノ口家、外間根屋、久高根人家、両ソールイ家、赤人ミイ家、ハニマン家など、参列している高級神人の家族が持参していた膳(既に刺し身と和え物が用意されている)にンバイを盛り付け、それぞれの神人の前に供える。昔は饗応されるすべての神人たちが、このように膳を用意したという。

祭場の神人たちはこの分配された神饌を食べる。ただし、大抵はすぐに下げて持ち帰る。

初穂儀礼との照応 絵描き扇でンバイを扇ぐ所作に相当するものが、初穂祭においてアザカでマブツチを扇ぐ所作である。そして、初穂祭においては引き続いて男だけがそのマブツチを食べている。その意味は、マブツチには男性に健康・精力をもたらす霊力があり、その具体的な効用は女(畑)に孕ませる種(男性自身)の能力を高めることにある。そして、初穂祭で神女たちだけが瓢箪ガークの汁を飲む儀礼は、種を孕む受胎の儀礼だった。結句、初穂祭は穀物の孕みと子孫(女子)の孕みの儀礼だった。

してみると、収穫祭はその結果としての穀物の出産と子孫(女子)の出産を意味しよう。その出産・誕生の象徴が、神饌・ンバイだろう。そして、絵描き扇でンバイを扇いで祓い清めてからンバイを共食・分配するのは、この誕生した穀物の豊作を祝うことになる。

なお、この日の嶽廻りでは、母親が女兒の新生児を抱いて初拜みをし、誕生祝いのンバイを根神から頂戴している。ここでは、子孫(女子)の出産・誕生と穀物の出産・誕生が一組になって祝福されている。

儀礼と穀物起源伝承の対応 このように見えてくると、絵描き扇でンバイを扇ぐ儀礼は、島の穀物起源伝承を記す『遺老説傳』(その釈文が『久高島由来記』)の次の記述と対応するとわかる。すなわち、始祖の白太郎と妣加那志が伊敷泊で(A a食物豊饒と子孫繁衍)を祈願したところ五穀の種子の入った白葦を入手し、その結果「五穀豊饒し、子孫繁衍し、遂に以て邑と為る」というモチーフに対応している。

また、ンバイを共食・分配する儀礼は、(E得た穀物の種物の種類)・(I久高島の穀物儀礼(初穂祭など)のはじまり)に対応している。

6 赤人ミーと根人の神酒上げ

iv 赤人ミーと根人の神酒上げ かつては次に、赤人ミーと両根人の

神酒上げが執り行われていた。そのあり方は初穂祭と同じである。

7 ウンサクの神酒上げ

vi ウンサクの神酒上げ 次いで、ウンサクの神酒上げが執り行われる。そのあり方も初穂祭と同じである(表8参照)。

この時も当然、王府関係者(聞得大君など)にこの神酒上げが執り行われた、と想定される。

儀礼と穀物起源伝承の対応 ここでも赤人ミーが両根人より上座にあり、儀礼と島の穀物起源伝承(A種物を得た者)が対応している。また、穀物儀礼の中核である神酒上げは、島の穀物起源伝承(E得た穀物の種物の種類)・(I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)に対応している。

そして、王府関係者(聞得大君など)にこの神酒上げが執り行われているので、(I麦が熟した春、王に献上)と(I琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)に対応している。

この神酒上げと島の穀物起源伝承の対応は、次の御殿庭での朝拝みでも同じである。

祭具の撤去 祭具が撤去され、外間殿での朝拝みが終わる。

8 祭場の移動

vii 祭場の移動 祭場の移動の仕方、初穂祭と同じである。

9 御殿庭での朝拝み

御殿庭での朝拝み 次いで、御殿庭での朝拝み(朝祭りとも)が始

まる。

以下の御殿庭での朝拝みは、右とほとんど同じ儀礼の反復である。外間殿での儀礼と違う点は、神饌のンバイのうち、久高ノロ・地頭ンバイの3膳が、久高ノロ家に届けられる程度である。

祭具の撤去 祭具が撤去され、外間殿での朝拝みが10時ごろに終わる。

七 クカウーとクカウーの御盆

1 クカウーとクカウーの御盆の原義

クカウーの本来の祭日 現行では両祭場において、1日目の夕^{ナシ}拝^ミみが終わるとクカウーが執り行われ、次いで2日目の夕^{ナシ}拝^ミみが終わるとクカウーの御盆^{ウツ}（料理）が供されて共食している。しかし、このクカウーとクカウーの御盆^{ウツ}は1日目の朝^{アサ}拝^ミみが終わってから執り行われるのが本来だろう。なぜなら、クカウーとクカウーの御盆^{ウツ}のプロトタイプ（原型）は初穂祭に付随するフカラクと同位相（島の大漁と渡海安全の祈願ならびに感謝）にあり、フカラクが1日目の朝^{アサ}拝^ミみが終わってから執り行われるのが本来だ、と考えられるからである。

現行のクカウー 前述したように現行のクカウーは、1日目の夕^{ナシ}拝^ミみの神酒上げが終わってから執り行われる。外間殿の祭場は、図7のようになる。

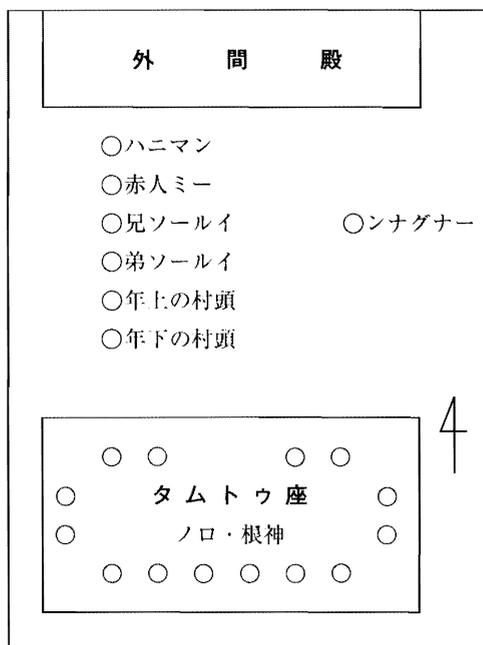


図7 クカウーの配置

最年長のンナグナーが、束ねた魚を神酒担ぎの棒に吊るし、その棒を担いで東方を向いて立つ。このンナグナーをサギンサ持^チチという。そして、このサギンサ持^チチが大声でクカウーと唱える。これでクカウーの儀礼は終わる。

クカウーといえば普通は赤シヨービンの鳴き声、あるいは赤シヨービンを指している。しかし、ここでは赤シヨービンとは無縁なようである。クカウーの語義は不詳だといべきである。クカウーの語義はフカラクの語義とともに、この一連の儀礼の意味を解く鍵になるだろう。次いで、御殿庭でも同じ儀礼が行われる。

現行のクカウーの御盆 前述したように現行のクカウーの御盆^{ウツ}は、2日目の夕^{ナシ}拝^ミみの神酒上げが終わってから両祭場で執り行われる。クカウーの魚を弟^ニソールイの家で調理し、これを外間殿で高膳に盛り付ける。両ノロと外間根神の膳には7切れ、その他の神人（各掟神、両根人、赤人ミー、ソールイ、ハニマン）には5切れずつ配膳する。ソールイには2人で1膳を割り当てる。

次いで、このクカウーの御盆^{ウツバシ}がウンサクたちによって各神人に配られる。この御盆は食べる真似だけして、すぐにウンサクによって各神人の家に届けられる。

次いで、御殿庭のタルガナーでも、同じ次第を反復する。

クカウーとクカウーの御盆の原義 前述したように、持ち前ではクカウーとクカウーの御盆の主題が大漁祈願になっていたもの、これは大漁と渡海安全の感謝が本来の主題だろう。

ニライカナイから穀物の種物が漂着した穀物起源伝承に基づいた初穂祭にちなみ、同じくニライカナイからの寄り物である魚も島にたくさん寄せ、渡海安全も保証してほしい、と祈願してフカラクを執り行っていた。そして、このフカラクに照応しているのがクカウーだろう。すなわち、魚の原郷である東方のニライカナイに向かつて、渡海安全の祈願も叶ってこれだけ立派な魚をいただいた、と大声でクカウーと唱え、大漁に感謝しているのではなからうか。そして、クカウーの御盆は、大漁と渡海安全を祈願してくれた高級神人たちに対する海人たちの饗応になる。

2 王府関係者への魚献上

王府関係者の招請 以上は、王府がかかわらない段階での収穫祭におけるクカウーの位相(プロトタイプ)である。

しかし、初穂祭のフカラクに王府の関係者が参列し、さらには王城の国王への魚献上へと展開していた。その由来を語るのが、『遺老説傳』(ならびに『久高島由来記』の「¹黄金の瓜種」の「¹久高島行幸・魚献上など」の由来のうちの「¹魚献上」)だった。こうしてみると、このフカラクと照応するクカウーにも¹聞得大君^{ウチノオホノミヤ}などの王府の関係者を招請し、クカウーの御盆を献上した、と考えられる。

儀礼と穀物起源伝承の対応 このように、(1)本来のクカウーは海人

(その代表のソールイ)の献上する魚を神饌にしてニライカナイに大漁と渡海安全を祈願(感謝)する儀礼であり、それが(2)主権とかかわることでクカウーはノロと根人が王府関係者へ魚を献上する儀礼を上した、と考えられる。このように、穀物起源伝承で¹王城の国王に魚を献上する条は、クカウーと間接的に対応・連動している。

クカウーは島の祭祀 こうしてみると、クカウーはフカラクと共に島の論理で貫かれた島の祭祀だとわかる。したがって、王府の祭祀である夕拌みにクカウーが付随するのは誤伝だ、と考えられる。

夕拌みに付随した事情 しかし、フカラクもクカウーならびにクカウーの御盆も現行では夕拌みに付随しているのは、なぜだろうか。それは、島側の王権への熱烈な接近が、島の祭祀から王府の祭祀に軸足を移動させ、島側がこの2つの儀礼を王府の祭祀のように錯覚したからではなからうか。王府の祭祀組織が健在な時は、もしこのような錯覚が島側にあつたとしても、王府の立場と島の立場を峻別する王府側がこれを認めなかった筈である。とすれば、この錯覚・誤伝が生じたのは、当然、王府が瓦解した明治初期以後のことになるう。

八 島軸廻り

新タムトウが百名からきた米俵を廻る 六月の粟の収穫祭だけ、朝拌みが終わると新タムトウたちが島軸^{シマキ}を7回、左廻り(時計廻り)する。

島軸とは外間殿の南方30メートルの道路脇にある聖地で、かつてここに聖なる石があつた。この石は戦後の道路工事で取り除かれたという。この島軸は外間村と久高村を二分する道路に位置しており、今ほど村が拡大していなかった昔はこの島軸が2つの村(シマ)の中心(軸^{シマキ})だった、と考えられる。村頭のウタイ・辻触れは、この島軸を

左廻りする形になっている。

かつてこの粟の収穫祭の時、玉城の百名のミントウン家から米俵が送られ、この島軸に立てた竿にかざしたという。粟と稲は共に六月に収穫祭を執り行うので、ミントウン家からきた米は新米だった。してみると、新タムトウの島軸廻りはこの米俵を廻る儀礼だったことになる。

儀礼と穀物起源伝承の対応 島の穀物起源伝承によると、得た穀物の種物のうち、稲種を玉城の百名のミントウン家を送って久高田に蒔いたという。そうすると、ミントウン家から収穫期(六月)に久高島に送られた米俵は、穀物起源伝承を裏付けにしており、稲の種物を送ってきた久高島に対する謝礼だった、と考えられる。琉球の五穀の発祥地、とくに稲と麦の発祥地を自負する島人にとって、新米が儀礼的に島に送られてくるのは大いなる誉れであり、それで村(シマ)の中心である島軸に竿を立てて米俵をかざしたのだろう。

また、12年に1度、午歳の十一月に執り行われるイザイホーには、祭りで用いる綱の料としてミントウン家から久高島に稲藁が送られてきた。これもまた、久高島の稲種を百名のミントウン家を送ったという穀物起源伝承に裏付けられているだろう。

こうしてみると、ミントウン家から送られた米俵をかざした島軸を新タムトウたちが廻る儀礼は、穀物起源伝承のうち、(E)得た穀物の種物の種類、(F)穀物の種物を蒔いた場所、(I)久高島のイザイホーに稲藁がくるは(じまり)に対応している。

米俵をかざした島軸を廻るのが、なぜ新タムトウたちなのだろうか。それは、神話的に同根の粟と稲の収穫祭が海を隔てた対岸同士で同時に催され、またその粟の収穫祭で新タムトウが昇格しているの、この果報めたい新タムトウたちに粟と稲の神話的・祭祀的交流のシンボルの米俵を賛仰させたのではなからうか。

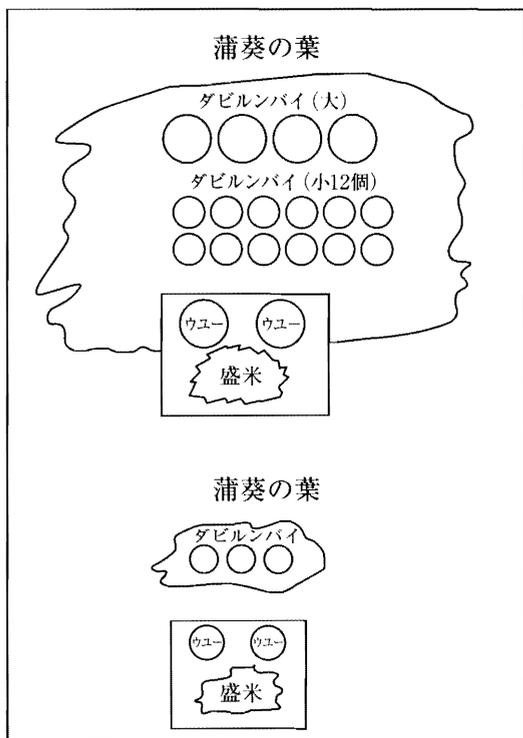
九 嶽廻り

スベー嶽から蒲葵御嶽へ 神女たちは一旦帰宅し、やがて両ノロ家に集合する。両ノロ、根神、その掟神、タムトウは、冠を外して白鉢巻きを被る。ウンサク、兄ヤジク、掃除役、神酒ハミヤーは、大衣を羽織り、白鉢巻きを被る。神酒ハミヤーは神饌の神酒やダビルンバイなどを運ぶ係で、ナンチュの最年長者2名が務める。

ノロ家をノロを先頭にして出発し、スベー嶽に行つて拝む。次いで、徳仁港、ボンキヤー、蒲葵御嶽へと道行きする。

蒲葵御嶽での祈願 蒲葵御嶽では、大拝み、若司、照り司の順に祈願する。それから、拝み小で祈願する。その時に供える神饌は、図8のとおりである。

図8 蒲葵御嶽での神饌(比嘉・1993b, 47頁より)



神饌のダビルンバイは、蒲葵御嶽の蒲葵の葉に載せられている。このダビルンバイは、根神の責任のもとにこの日の早朝に作られたものである。

初拝み この嶽廻りは、かつてこの1年間に生まれた女子の新生児を母親が抱いて参列したという。これを初拝みという。大拝み終了後、ウユー（神酒の一種）を外間ノロから順次共飲する。次いで、大きなダビルンバイ4個のうち、1個を根神が誕生祝いとして新生児に与える。小さなダビルンバイは、全神女に分配される。また、新生児の親から神女たちへの感謝の気持ちをこめて煮魚とお握りが振る舞われ、女子の誕生が報告された。収穫祭を女の祭り（健康祈願）とすることの内実は、この初拝みに端的に示されている。

以上を嶽廻りという。

儀礼と穀物起源伝承の対応 鳥の穀物起源伝承によると、穀物の種物と一緒に久高島の御嶽の元になった蒲葵などの種物も漂着している。そして、新穀で作ったダビルンバイを蒲葵御嶽の神木である蒲葵の葉に載せているので、この儀礼は鳥の穀物起源伝承の（E）得た穀物の種物の種類、（H）植物による久高島の御嶽のはじまり、（I）久高島の穀物儀礼（麦の初穂祭など）のはじまり）に対応している。

さらに、根神の責任のもとに作ったダビルンバイを根神が女兒の新生児に与えるのは、鳥の穀物起源伝承を記す『遺老説傳』の次の記述と対応している。すなわち、始祖の白太郎と妣加那志が伊敷泊で（A a食物豊饒と子孫繁衍）を祈願したところ五穀の種子の入った白壺を入手し、その結果「五穀豊饒し、子孫繁衍し、遂に以て邑と為る」というモチーフに対応している。ここの「子孫」とは女兒を意味している。なお、根神が（A a食物豊饒と子孫繁衍）を主題として司祭する祭りには、3日目の村の初拝みもある。

一〇 1日目の夕拝み

1 外間殿での夕拝み

外間殿での夕拝み 初穂祭と同じく、夕拝み（夕祭りとも）が外間殿から始まる。

2 準備

神饌の準備 初穂祭と同じく、午後、村頭がウタイ（お知らせ）をすると、割り当てられた組の親たちが両祭場に樽真神酒を運ぶ。そして、弟ウンサクが祭場の所定の場所に樽真神酒2膳を供える。

祭場の配置 祭場（外間殿・御殿庭）の配置は、朝拝みと同じである。次いで、もう1人の村頭がウタイをすると、全神人が外間殿に参集し、所定の座に着く。全神人の神衣裳と祭具は朝拝みと同じである。

3 絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ

ii 絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ 初穂祭と同じく、両ノロは絵描き扇を開き、樽真神酒を3回ほど扇ぎ、それからタムトウ座に戻る。

供えられた神酒は村頭が合掌した後、「ウンサク、カタチキリ」（ウンサクよ、片付ける）という、ウンサクがこれを下げる。祭り終了後、この神酒は村頭が持ち帰る。

前述したように、現行の村頭がかつての地頭の代理もしている。してみると、普段は神女たちに頭の上がない村頭が神女に命令しながら神饌を頂戴しているのは、この神饌の係が王権の末端に位置する役人・地頭にあつたことを示しているよう。

「絵描き扇でンバイを扇ぐ」に相当 ii ノロが絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ所作は、朝拝みでノロが絵描き扇でンバイを扇ぐ所作に相当する、と考えられる。

島の収穫祭の朝拝みでノロが絵描き扇でンバイを扇ぐ所作は、島の初穂祭の朝拝みでノロがアザカでマブツチを扇ぐ所作に照応していた。その意味は、初穂祭での所作は穀物と子孫(女子)の孕みであり、収穫祭での所作はその結果としての穀物と子孫(女子)の誕生だった。これと同様に、王府の収穫祭の夕拝みでノロが絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ所作も、王府の初穂祭の夕拝みでノロが絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ所作に照応していた。

しかしながら、孕みを促す初穂祭の樽真神酒と誕生を象徴する収穫祭の樽真神酒が同じなのは、不審というべきである。これは、王府の祭祀が衰退したことから、王府の本来の神饌の代わりに島の神饌・樽真神酒を用いているのかもしれない。

このように現行では、初穂祭と収穫祭がいずれも同じ樽真神酒を用いているので判然としないものの、その意味は、王府の初穂祭と収穫祭の夕拝みでノロが絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ所作も、穀物と子孫(女子)の孕みであり、その結果としての穀物と子孫の誕生だった、と考えられないだろうか。

儀礼と穀物起源伝承の対応 こうしてみると、収穫祭でノロが絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ儀礼の意義は、初穂祭での同じ儀礼の意義とほぼ同じことになる。それは、次のとおりである。

王府の穀物起源伝承を見ると、人のはじまりは天帝の御子の兄妹で、その長男が国王、長女が君々(聞得大君など)であり、天から貰った五穀のうち麦・粟・菽・黍を久高島に植えたという。とすると、五穀の種物を神から直接受け取った者は天帝の御子の兄妹ということになる。そして、儀礼上では国王と聞得大君がその天帝の御子の兄妹に相

当している。こうしてみると、天帝の御子の兄妹が最初に植えた久高島の麦・粟の初穂で作った神酒を国王が飲み、穀物と子孫の孕みを図り、麦・粟の収穫物で作った神饌によってその結果としての穀物と子孫の誕生を成就した、ということではなからうか。

ただし、天帝の御子の兄妹が「食物豊穰と子孫繁衍」を図るとは、王府の穀物起源伝承には表立って記述されていない。

こうしてみると、ノロが絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ所作は、王府の穀物起源伝承の《A種物を得た者》・《E得た穀物の種物の種類》・《F穀物の種物を蒔いた場所》・《I琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》・《I二月の久高島行幸のはじまり》に対応していることになる。

聞得大君の司祭 とすれば、この絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ所作は王府の祭祀の核心部なので、それを王府の祭祀組織の末端に位置するノロが執行するのは、不自然なことである。本来、この儀礼は天帝の御子の妹に相当する王府の最高神女・聞得大君が執行すべきものでなかったらうか。現行のあり方は、聞得大君の代行だろう。

4 ウンサクの神酒上げ

vi ウンサクの神酒上げ 次いで、朝拝みと同じく、ウンサクが神酒上げをする。

王府関係者への神酒上げ かつての収穫祭の夕拝みにおけるvi神酒上げは、国王の座が空席になるだけで、他は初穂祭の夕拝みと同じだった、と考えられる。

儀礼と穀物起源伝承の対応 こうしてみると、夕拝みにおけるウンサクの神酒上げも、王府の穀物起源伝承の《A種物を得た者》・《E得た穀物の種物の種類》・《F穀物の種物を蒔いた場所》・《I琉球の穀物

儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》・《I二月の久高島行幸のはじまり》に対応していることになる。

5 祭場の移動

vii 祭場の移動 初穂祭の夕拝みと同じく、ウンサクの神酒上げが終了すると、両根人を先頭にして次の祭場の御殿庭に移動する。

6 御殿庭での夕拝み

御殿庭での夕拝み 御殿庭での夕拝みも、朝拝みと同じく、神酒上げをする。

7 クカウー

クカウー 前述したように、現行ではクカウーが外間殿と御殿庭で執り行われる。クカウーは鳥の祭祀なので、クカウーが王府の祭祀である夕拝みに付随するのは不自然である。

一一 2日目の夕拝み

2日目の夕拝み 本来は夕方に執り行うべき儀礼であるものの、祭祀の簡略化のために早朝に執り行っている。儀礼はviiウンサクの神酒上げだけである。他は1日目の夕拝みと同じである。

クカウーの御盆 前述したように、現行ではクカウーの御盆をする。クカウーの御盆は鳥の祭祀なので、クカウーの御盆が王府の祭祀である夕拝みに付随するのも不自然である。

祭場の後片付け クカウーが終わると、タムトウ(神座)が御殿庭

の東側の道路脇に収められる。また、外間殿の赤綾屏風と白い屏風を外す。

3人の司祭者 島では、1日目の朝拝みの司祭者は外間ノロ、1日目の夕拝みの司祭者は久高ノロ、2日目の夕拝みの司祭者は根神だという。しかし、これが誤りであることは、畠山「二〇〇七a、一一七頁」で指摘している。

一二 村の初拝み

村の初拝みの祭日 村の初拝みは、かつて3日目の午前に外間殿で執り行われた。現行の祭日は、祭祀の簡略化によって2日目の夕拝みの終了後に繰り上げられている。

神饌の準備 神饌の料は、前々日の量り前で徴集した穀物と少々のお金で買った魚である。穀物を炊くのは年上の村頭の家で、盛り付けなどの準備は村頭の妻が外間殿です。神饌はンバイ、煮魚、刺し身である。

外間殿での拝み 綾物の上に大衣を着用した外間根神、両ノロ、各掟神、シマリ妣、シネリキヨなどの神女が外間殿の中に座を占め、両根人、赤人ミ、両ソールイ、ハニマンなどの男神人と両村頭が庭のタムトウ座にいる。この祭りの司祭者は根神である。根神は、火の神(ウカマガナシー)、ミ、大庫裡ミンナカ、床の神、ムンブジー・ムン妣(外間根屋の始祖)に神饌を供えて拝む。

神饌の共食 次いで、参列者にお盆が出される。実際には少し食べただけで、村頭の妻が各神人の家に届けている。

祭りの主旨 この村の初拝みの主旨は、収穫した穀物のお初を供えて、穀物の豊作を感謝・祈願し、女子の健康・誕生を祝うものである。嶽廻りの初拝みと同じく、ここでも穀物の出産・誕生と子孫(女子)

の出産・誕生が一組になって祝福されている。

儀礼と穀物起源伝承の対応

根神はシマ人の婚姻儀礼と誕生儀礼を司っている。すなわち、根神は結婚式の日取りや赤子への命名の儀式・名付けを執り行っている。畠山「二〇〇六、四六六・四六七頁」によると、外間根神自身、外間根人と祭式的には兄妹の關係にあり、この兄妹關係は島の兄妹始祖伝承（白太郎・妣加那志の兄妹が夫婦になって島の子孫繁栄の礎を築いた）を背景にもっている。このように、外間根神が久高島の子孫繁栄を司るのは、この兄妹始祖伝承を裏付けにしているので、正月行事で外間根神と外間根人が盃を交換する時に「東方のフェーナガーキ」をうたって、2人の聖婚によって子孫（男子）の誕生・繁栄を願いえた。

したがって、この収穫祭で食物の誕生・豊饒とともに子孫（女子）の誕生・繁栄も祝っているので、子孫の誕生・繁栄を司る根神が収穫祭で子孫の誕生・繁栄を祝う祭り、すなわち嶽廻りでの初拝み（1日目）と村の初拝み（3日目）を司祭する、と考えられる。

こうしてみると、村の初拝みは、島の穀物起源伝承の（A a食物豊饒と子孫繁衍）に対応している。収穫祭を女の祭り（健康祈願）とすることの内実が、この「村の初拝み」にもよく示されている。

重層している穀物儀礼

以上、穀物儀礼はノロの司祭する祭祀、国王の司祭する王府の祭祀の他に、各種の神人が司祭する祭祀があった。それは、初穂祭においてはタムトウあるいはティンユタの司祭による家の祭り・「穂花拝」であり、収穫祭においては嶽廻りで根神の司祭する「初拝み」、「村の初拝み」である。同様のことは種下ろしにもあった。すなわち、元家の当主たちが自分たちの畑に麦の種を下ろして豊作を祈願する日に、ニラー大主（神女）も自分の管轄する拝所に麦の粉を供え、穀物の原郷・ニライカナイのニラー大主（神）に豊作を祈願していた。このように、穀物儀礼には各種の儀礼が重層している。

一三 結び

まとめ 以上、本論は久高島の麦と粟の収穫祭の次第を可能な限り復原して記述した。そして、それらの収穫祭の次第が島ならびに王府の穀物起源伝承と対応關係を持ち、またその収穫祭の次第が初穂祭の次第と照應關係にあることを指摘した。この2つの穀物儀礼と穀物起源伝承の対応關係、ならびにこの2つの穀物儀礼の次第の照應關係は、「表4初穂祭の次第と穀物起源伝承の対応一覧表」と「表9収穫祭の次第と穀物起源伝承の対応一覧表」に端的に示されている。

参考文献

- 畠山篤 二〇〇六 a 「沖縄の祭祀伝承の研究―儀礼・神歌・語り―」 瑞木書房
- 畠山篤 二〇〇七 a 「久高島の初穂祭（朝拝み）と穀物起源伝承―島の伝承―」 『弘前学院大学文学部紀要 第43号』
- 畠山篤 二〇〇七 b 「久高島の初穂祭（夕拝み）と穀物起源伝承―王府の伝承―」 『弘学大語文 第33号』
- 比嘉康雄 一九九三 b 「神々の原郷 久高島 下巻」 第一書房